

マスターズを彩るレジェンドたち(7)

神無月の10月が終わり、冬来たるの霜月の11月。駅伝シーズン到来だが、今年は新型コロナウイルス流行の影響で都道府県対抗全日本マスターズ駅伝も中止となった。マスターズ陸上を彩ったレジェンドも7回目。かつて活躍した人、現在も名を高めている人を組み合わせて紹介しているが、今月号も旧・新の名選手を。ページを飾るレジェンドに拍手を！

写真提供／日本マスターズ連合、田中美香さん

アジア大会からマスターズへ
黄金の足を復活させた
田茂井宗一さん(大阪)

田茂井宗一さん(大阪)がマスターズ陸上を始めたのは68歳からだ。田茂井さんの結婚の仲立ちをした故・南部忠平さん・久子さん夫妻の勧めでマスターズへ入会したのがきっかけ。南部忠平さんは1932年ロサンゼルス五輪の三段跳で15m72の世界新優勝の金メダリストだ。マスターズ連合では名誉副会長を務めた。南部さん夫妻から「マスターズ陸上で、かつての思い出をもう一度」と言われ、次第に“黄金の足”をよみがえらせた。

田茂井さんは、1951(昭和26)年3月にインドのニューデリーで開かれた第1回アジア大会の初日に行われた10000mを制し、ヒーローになった。気温は45度。レース中に田茂井さんの脚が動かなくなり、全身が硬直した状態となった。日射病にやられ、意識が薄れてきた。「あと2周だ」までは覚えているが、後は全く意識がなくなり、インからアウトへとジグザグの“千鳥足走法”となった。

このような走りになりながらもトップを譲らず1位でゴールした。33分49秒6のタイムは別にして、日本勢に弾みをつけた力走は称賛的となった。表彰式の後、医務室へ。疲労と食欲を失った田茂井さんだったが、1日おいた5000mに出場。だが、やはり粘りを欠いて3位にとどまった。

アジア大会だけではない。田茂井さんが中国から食わず飲まずで復員したのが1946(昭和21)年の夏。大阪鐘

紡(現・カネボウ)に職場復帰後、1948(昭和23)年には20kmレースで日本最高をマーク。翌1949年の第33回日本選手権の5000m、10000mを制している。

田茂井さんは全盛期に世界で広く知られていたアメリカの雑誌『ライフ』に走っている姿が掲載されたことも。1923(大正12)年に京都府で生まれ、旧制府立峰山工業(現・峰山高)を出て、鐘紡に入社。当初はソフトテニスをしていて、以後、陸上の道へ。

時は流れ、マスターズに復活した1年後、69歳で出場した全日本、近畿マスターズのM65・5000mではトップと1周遅れとなり、悔しい思いをした。そこで練習は「1km6分のペースで3日に1回は8kmを走る」を繰り返した。この後「1カ月に2～3回は13km」を加え、冬期練習にも力を入れた。こうして長年のブランクを取り戻し、往年の足が戻ってきた。

70歳になった1993(平成5)年。5月に神戸市であった第14回全日本マスターズで1500mと5000mに勝ち、6月には3000mで10分53秒38の世界新をマーク。9月に大阪市での1500mで5分10秒6の日本新を。10月に宮崎県で行われた第10回世界マスターズでは5000mで頂点に立った。

練習中にアキレス腱を痛め、1年半近く苦しんだことも。にもかかわらずめげなかった。宮崎大会の後の第11回世界大会(アメリカ)の2000mSCに出場し3位。第12回大会(南アフリカ)では同種目で2位に上がり、M75となった76歳での第13回大会(イギ



2010年の近畿マスターズに出場した田茂井さん。68歳からマスターズに参加し、偉大な記録を打ち立てた

リス)では1位の座に。記録も9分17秒38の世界新だった。

さらに2003(平成15)年の第14回大会(オーストラリア)のM75・2000mSCで2連勝。次の第15回大会(プエ

●田茂井宗一さんのクラス別世界・日本記録

クラス	種目	記録	年齢・樹立年
	1500m	5分10秒6	(70歳・1993年)
M70	3000m	10分53秒38※	(70歳・1993年)
	2000mSC	9分11秒14	(72歳・1995年)
M75	2000mSC	9分17秒38※	(76歳・1999年)
	10000m	49分31秒99	(80歳・2003年)
M80	2000mSC	10分01秒18※	(80歳・2003年)
	1マイル	7分59秒31	(84歳・2007年)
	10000m	1時間04分14秒50	(86歳・2009年)
M85	2000mSC	11分36秒93※	(85歳・2008年)

※は世界記録

ルトリコ)では80歳となり、M80・2000mSCでは10分02秒43の世界新で勝った。10000mも49分31秒99の日本新で1位に。世界大会後に石川県金沢市で開かれた第24回全日本マスターズの2000mSCに10分01秒18と、世界大会で出した記録を上回る世界新を樹立した。

同年の9月、田茂井さんはNHKの『クロズアップ現代・世界記録に挑む高齢の競技者』のなかで紹介された一人。アジア大会で大活躍したのが、2000(平成12)年の第11回大会だ。M75・800m、1500m、5000m、2000mSCと4×100mR、4×400mRの両リレーを含め六冠を達成した。すごい一言だ。

すでに永眠された田茂井さん。その勇姿を見ることができずに寂しい。

短期間に中・長距離 3種目で日本新連発 田中美香さん(50歳・兵庫)

これは驚きだ。14日間のうちに中・長距離3種目で日本新を連発。この離れ業をやったのは兵庫県三田市に住む田中美香さんだ。田中さんは1970年9月14日生まれ。

誕生日前日の9月13日、姫路市であった同市選手権のW45・1500mで4分55秒45の日本新をマークして滑り出し、2日おいた同月15日に神戸市長距離競技会のW50・3000mで10分31秒43と2発目の日本新を。田中さんにとって、誕生日1日後の50歳と1日目の快挙だった。

連続日本新の3発目は同月27日の関西実業団選手権(大阪)のW50・5000m。17分46秒80でゴールした。それぞれの種目の従来の日本記録は、1500mが4分56秒61(2009年)で11年ぶりに書き替えた。3000mは10分41秒97(1998年)で実に22年ぶりに10秒も更新した。5000mは17分55秒57(2011年)で9年ぶりの新記録。

このすごいパワーの持ち主・田中さんは大学2年生と、大学受験を控える高校3年生の男児2人を育てる主婦。



14日間で日本新を3つ出した田中さん。関西実業団選手権のW50・5000mで3度目の日本新をマークした

夫と子供の4人家族で、週3、4日は尼崎市まで通い、事務のパートをするなど多忙にもかかわらず、受験前の次男の面倒を見ながら、毎朝1、2時間の練習を欠かしたことがない。

今回、中・長距離で日本新を立て続けに出した田中さんだが、過去の陸上歴は? 中高校生の頃は短距離で汗を流していた。「そうですね。中学生のときは100m13秒5だったかな。高校生になっても13秒台でした」の後、「大きな大会に出たこともないし、高3ではリタイアの状態でした」と。

大学は近大で学んだが、陸上とは縁が切れていた。再び走り始めたのは、結婚して次男の子育てが一段落した30代半ばからだ。「大会に出ようという訳でなく、ダイエットが目的で」だが、次第に“走る欲”が出てきた。マスターズに登録したのが3年ほど前。陸協にも登録した。

実力を認められ、都道府県対抗全日本マスターズ駅伝の兵庫代表にも選ばれるようになった。一昨年の2018年、第31回大会では1区を任せられ5位発進。チームは優勝した。昨年の第32回大会は3区で区間賞を獲得。チームは残念ながら4位と5連覇を逸したが、田中さんは2位まで追上げる健



中高の陸上部時代は大きな大会に縁がなかったというが、マスターズの中・長距離で才能を開花させた

闘を見せた。

若い頃の短距離からマスターズで中・長距離へ。その理由を田中さんは「短距離は素質の要素が大きいです、長い距離は努力すればするほど、記録に表われてきますから。楽しいですね」と話す。田中さんの練習には「舌を巻くほど」と感心する関係者は多い。

マスターズ駅伝の北垣章監督(57歳)に練習スケジュールを相談したりと熱心さも相当なもの。北垣さんは高校駅伝界の名門・報徳学園高の出身。3年間、都大路を走り、3年生のときには1区走者で母校は初の全国制覇(1981年)。当の北垣監督も田中さんの熱意には感嘆している。

田中さんの次の目標は12月20日に岡山市である山陽女子ロードレースのハーフマラソンだ。「このレースで日本記録を」と意欲を燃やしている。ハーフマラソンのW50の日本記録は1時間23分27秒。果たして田中さんの夢が実現するか。結果を楽しみに待ちたい。

●田中美香さんのクラス別日本記録

クラス	種目	記録	年齢・樹立年
W45	1500m	4分55秒45	(49歳・2020年)
	3000m	10分31秒43	(50歳・2020年)
W50	5000m	17分46秒80	(50歳・2020年)